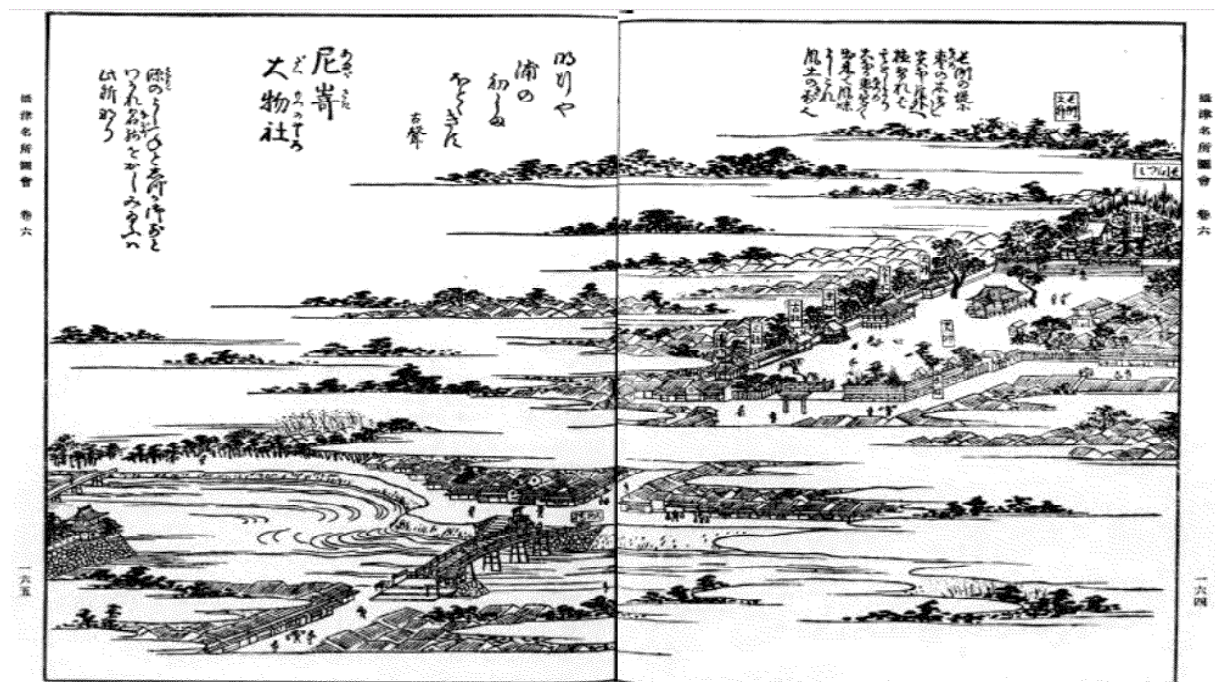


「尼崎」…地名の意味は？

784年の長岡京遷都（せんと：都を移すこと）にともない神崎川と淀川をつなぐ水路が開かれたことで、神崎川は都と瀬戸内・西国（さいごく：今の中国・四国・九州地方）を結ぶ交通路となりました。平安時代後期には市域の神崎・今福・杭瀬・長洲・大物は、川船と渡海船（とかいせん：海を行き来する船）を乗り換える河口の港として栄えました。尼崎の地は港町として発展し、鎌倉・室町期の史料には「海士崎」「海人崎」「海崎」（あまがさき）とも記されています。

「あま」とは、古代・中世には漁民・海民を意味します。つまり、「あまがさき」とは漁民・海民が暮らす、海に突き出た場所ということになります。やがてこの尼崎には、大覚寺や本興寺（ほんこうじ）を中心に、中世（ちゅうせい：鎌倉時代～戦国・安土桃山時代までの期間）日本有数の自治都市（じちとし：地域住民が自ら運営を行う都市・地域）が形成されました。こうした神崎川河口の繁栄に加えて、市域では古代以来各所に荘園開発（しょうえん：地域の有力者がもつ広大な農地）がすすめられ、やがて近世（きんせい：安土桃山～江戸時代 室町幕府の滅亡から明治維新を含む）には豊かな農漁業地帯、近代には日本を代表する工業都市のひとつとなっていくます。このように「尼崎」は、川の流れ（河川流域の繁栄）、時代の流れ（時代の社会的背景）とともに発展してきたと言えます。



江戸時代 大物付近（大日本名所図会 第1輯第6編撰津名所図会 国会図書館デジタルコレクション）